

時代の新秩序－主題別科目を担当して－

渡 辺 和 行*

なにも21世紀の話をしよというわけではない。「時代の新秩序 (Novus Ordo Seclorum)」とは、ジョージ・ワシントンの肖像がある1ドル紙幣の裏面にラテン語で印刷された言葉だ。われわれは通常、ドル相場に一喜一憂しはするが、ドル紙幣自体に想いを馳せることはない。もちろんこの態度は、ホモ・エコノミクスとしての人間にとって至極当然のことである。小論では、ホモ・ポリティクスとしての人間の側面から紙幣の政治人類学を糸口にして、私もメンバーとして参加した主題別科目、「モダンを比較する」の報告をしよう。

紙幣を取り上げたのは、ポスト冷戦期の現在、紙幣の世界にも主役の交代が起きており、紙幣の政治人類学とでも呼ぶべき領域が生まれつつあるからである¹⁾。それは、ここ数年の国際関係に明らかである。1996年2月にも、欧州通貨機構が単一通貨「ユーロ」の紙幣7種類のデザインを募集すると発表した。1999年に予定どおり通貨統合が実現すれば、2002年からユーロ紙幣が流通するのである。

近未来のことはさておき、近接過去においても紙幣の交代を見た。1990年10月のドイツ統一に先立つ7月の通貨統合で東独マルクのエンゲルス(50マルク)やマルクス(100マルク)が、東独国家と命運をともしたことはなお記憶に新しい。通貨統合で東独マルクは西独マルクに飲み込まれたのである。その西独紙幣の特徴は、デューラーのような有名人から無名の画家までの絵画に登場する人物像を利用していることである。通貨統合後には、グリム兄弟のほかにも4種類の女性の肖像画も登場した。男女平等の表れでもある。ドイツ紙幣に政治家や国王が登場しないのは、特定の人物の採用がドイツ・ナショナリズムを鼓舞するものと受け取られ、周辺諸国に不安を与えるという配慮からである。ナチズムの反省があるのであろう。

1991年にはソ連邦が消滅し、翌年にルーブル紙幣からレーニンが消えた。レーニンがソ連邦より1年存続しえたのは、事態の急激な進展とインフレによって新紙幣発行の準備が整わなかったからである。新札の図柄には、レーニンに代わってロシア国旗やクレムリン宮殿の図像が登場した。ロシア・ナショナリズムへの回帰を窺わせるデザインである。

また、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドの紙幣がエリザベス女王の肖像を共通して用いているところに、「イギリス連邦」という枠組みを具体的に実感することができるし、逆に、昨今のオーストラリアの世論に見られるイギリス王室離れのメンタリティーを連邦からの自立意識の表れと理解することもできる。

このように体制の転換といった政治変動だけでなく、国民意識の変化や通貨統合、さらに電子マネーによるキャッシュレス社会の到来という技術革新によっても、紙幣は姿を消していく可能性がある。人は、今まさに消失しつつあるときにそれを記録しようとする動物なのであろう。紙

*教授 法学部(政治史)

幣の政治人類学ないし経済人類学が求められるゆえんである。

とまれ、政治変動とともに紙幣のデザインも変化するが、アメリカの紙幣は息が長いことで有名である。現行の1ドル紙幣は、1935年以来、大きな変化がない。それは、アメリカの体制が安定していることを示している。それでは、図像学によってそれらのシンボルを解読しよう。

ワシントン初代大統領の肖像がある1ドル紙幣の裏面は、真ん中に大きくONEと印字され、



図1 1ドル紙幣の表

その両側に1782年に制定された国章(The Great Seal)を載せている。ONEの右には国章の表の鷲が描かれた。アメリカの国鳥ハクトウワシが13枚の葉のついたオリーブの枝と13本の矢を2本の足で握り、その鷲の

上には13の星が書き込まれている。これらの数字は最初に独立した13州を意味している。鷲がくわえているリボンには、「多数からなるひとつ (E pluribus unum)」と国家の統一を謳いあげていた。鷲は戦いを意味する矢のほうではなくて、平和を表すオリーブのほうを向いている。鷲の胸にある盾の縞の数も13であり、13の植民地が参加した大陸会議を象徴していた(図3)。

ONEの左には国章の裏の絵で、未完成のピラミッドとその上に啓蒙の理性の光を意味する目が三角形のなかに描き込まれた。この目は、フランスの人権宣言に描かれたものと同じである。未完成のピラミッドは、国の成長と建設の継続を表し、その上の目は、天地創造の神と教育と知識の自由を表している。理性の目の上には「神はわれわれの事業を祝福する (Annuet Coeptis)」が、ピラミッドの下には「時代の新秩序」がラテン語で書かれている。2つのラテン語は、ウェルギリウスの叙事詩『アエネイス』から取られたものである。ピラミッドの底辺にはローマ数字でMDCCLXXVI=1776年と刻まれた(図4)。1776年はアメリカ独立の年であり、アメリカの原点である。それだけに、アメリカの体制原理を表象するこの意匠をいじることはできないだろう。ドル紙幣は、アメリカの独立と建国のシンボルであり、ドルには、アメリカの理念が刻印されているのである。

5ドル紙幣は奴隷解放のエイブラハム・リンカーン大統領、10ドル紙幣にはアメリカ憲法制定者で初代財務長官のアレキサンダー・ハミルトン、20ドルはトクヴィルが「アメリカの民主政」を発見した時代のジャクソニアン・デモクラシーで知られた第7代大統領アンドリュー・ジャクソン、50ドルが南北戦争

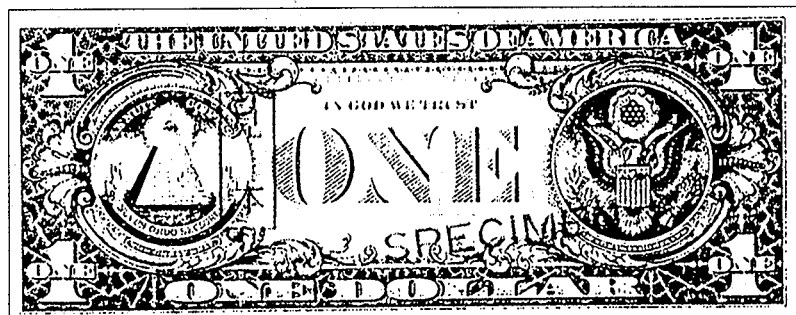


図2 1ドル紙幣の裏

時の北軍の指揮官を務め、後に第18代大統領となったグラント、100ドル紙幣は政治家で科学者でもあったベンジャミン・フランクリンである。このようにアメリカの紙幣には、建国の英雄や

政治家が取り上げられているところに特徴がある。

近代国家建設時の人物が多いという点では、日本の紙幣も同じである。日本でも、明治時代の政治家や学者が多い。戦後直後に発行された日本銀行券は、100円札には板垣退助、500円札が岩倉具視、1000円札が聖徳太子であり、1963年からは1000円札が聖徳太子から伊藤博文に代わった。神武景気による経済成長で1957年から1958年にかけて5000円と10000円札が登場し、ともに聖徳太子が描かれた。私は使用した記憶がないが、50円紙幣に高橋是清という時代もあった。現在流通している夏目漱石、新渡戸稲造、福沢諭吉は1984年に印刷された。このように日本の紙幣の顔は、政治家から文人や学者へと変遷してきた。それには、明治100年を経て「経済大国」へと高度成長をとげたこの国の新たな戦略があった。それは「文化国家」の戦略である。

「Manifest Destiny」にもとづいて黒船が浦賀にやってきて、日本は開国した。開国には両



図3

面的な意味があった。自己を外（国際社会）に対して開くという意味と同時に、その国際社会に対しては自己を統一国家として画するという二重の意味である。黒船ショックで鎖国をとりて以来、この二重の課題を追求してきたのが日本の近代であった。近代西欧をモデルとして「追いつけ追い越せ」と慕進してきた日本は、オイル・ショック以降のスタグフレーションをくぐり抜けるなかで、経済中心モデルを相対化し、文化モデルへとシフトしはじめた。文化の振興と普及や文化財の保護を目的

とする文化庁が設置されたのは、1968年のことである。物質文明の追求が公害をもたらしていた時期である。モノからココロへ、マネージからイメージへの転換が生じる。その時期を画した事件の1つが、紙幣の図像の差し替えであった。こうして、「文化国家」へのルールが敷かれた²⁾。しかし、これにもモデルがあった。

「文化国家」の先輩はフランスである。フランスの紙幣には、フランス文化の精華がちりばめられた。500フランは『パンセ』のパスカル、200フランは『法の精神』のモンテスキュー、100フランが画家のドラクロワ、1993年から50フランは『星の王子さま』のサン-テグジュペリ、20フランが「牧神の午後への前奏曲」のドビュッシー、10フランが19世紀のロマン派作曲家ベルリオーズである。哲学者、作家、画家、音楽家と多彩である。パステル調の色彩でかろやかな印象を与えるフランスの紙幣からは、馥郁たる文化の香りがただよってきそうである。

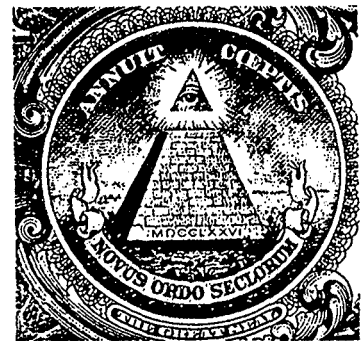


図4

登場人物に明らかなようにフランス紙幣には、17世紀から20世紀までのフランス史が凝縮されている。近代科学の揺籃期に無限と無のあいだで神を求めてうち震えたパスカル、ときにはペルシア人になりすまして絶対王政を批判した高等法院評定官のモンテスキュー、1830年の7月革命に題材を取った「民衆を導く自由の女神」やアナキストのプルードンの絵によって19世紀の自由の拡大を画布に描いたドラクロワ、『夜間飛行』士として、『人生に意味を』求めて飛び回り、第二次世界大戦では『戦う操縦士』として大空に散ったサン-テグジュペリ、象徴派の芸術運動の影響下に印象主義の作風で知られ、「子どもの領分」を大切に「放蕩息子」まで受け入れるド

ビュッシー、ロマン主義音楽の作風をもった「ローマの謝肉祭」や「幻想交響曲」のベルリオーズなどであった。

もっとも、フランスも1960年のデノミネーション実施以前には、アンリ4世やナポレオンといった国王や皇帝の肖像を用いていた。今後は100フラン紙幣にはエッフェル塔を作ったギュスターヴ・エッフェルが、500フランには映画の発明者のリュミエール兄弟が、1000フランには物理学者のキューリー夫妻が描かれることになっている。

このように紙幣の政治人類学は、比較近代史へとおのずと進む。紙幣のなかに各国の近代史が垣間みられるからである。今年度から始まった主題別科目「モダンを比較する」は、近代の形成過程の比較がテーマであった。教育・法・経済の3学部にまたがる4名の教員が、オムニバス形式で行った授業である。「近代とはなにか」という共通意識のもとに、総論と各論、および総括的シンポジウムという形で運営された。総論では、近代化論や政治文化論が登場する歴史的背景と理論の紹介、および文化と文明の語義論と英・仏・独・日の4カ国における文化と文明の受容の仕方などを論じ、各論では、仏・独・露・日のそれぞれの近代化過程を取り上げ、受講生が共通点と相違点をみずから引き出せるように努めた。

授業開始前には、このようなシラバスや理想を掲げていたのであるが、今年度は、いろいろと授業以前の失敗もあった。初回の受講生へのハンコ押しの時間を計算にしておらず、時間不足で内容を省略せざるをえなかったり、講義室のマイクが故障して学生によく聞こえなかったこともあった。授業の中身についても、内容を精選する必要があるといった反省も担当者のあいだから出された。学生の受講態度に関しては、板書をしないとノートを取らないなどの受け身的な態度が目についた。また、高校の社会系科目を1科目しか履修しておらず、それ以外の分野は理解できないという「苦情？」も多かった。総じて、「知らないこと」を恥として、積極的に、主体的に学ぶという姿勢に欠ける学生像が浮かび上がった。私はそれを「知的廉恥心」の欠如と呼びたいが、知的廉恥心なくしては「無知の知」を自覚することもないであろう。それでも、7回行った質問カードから明らかになった諸点については、来年度の講義のなかでフィードバックしてゆきたい。

Omunibusの語義は「万人のために」であるが、オムニバス形式の主題別科目が受講生全員のためにより良く組織され編集されることは、われわれのメチエ (métier) である。こうして初めて、主題というサブジェクトに主体的に取り組んでマスターし、みずからの羅針盤をもって世界へとプロジェクト (投企) する香大生が誕生するであろう。そのような香大生は、幅広い教養を身につけて知力を磨き、物事を選定して判断する識力を修得してくれることであろう。知力と識力を身につけさせてこそ、改変された教養教育に「時代の新秩序」が打ち建てられるのである。

注

- (1)各国の紙幣については、宮田昌宏『紙幣が語る戦後世界』(中公新書、1994年)、植村峻『お札の文化史』(NTT出版、1994年)、植村峻『世界の銀行券』(印刷局朝陽会、1987年)、山口和雄『日本の紙幣』(保育社、1984年)などを参照した。
- (2)バブル経済の崩壊から昨今の住専問題にいたるこの国を眺めていると、「文化国家」の戦略も表面的でしかなかったことが分かる。